

## 唐代六言絕句の定型性について

## 一 序論

「六言絶句」という詩型は、「六言」と「絶句」という、ふたつの要素からなっている。そのなかで、後者の「絶句」という点については、作品数も先行發言も、きわめて豊富である。それとは對照的に、前者の「六言」という点については、輕視、さらには無視されがちであった。

まずは、ここで、いまにいたる六言絶句の關連文獻を、簡単に整理・紹介しておく。

六言絶句は、作品選集類では、省略されていることがおおい。たとえば、本稿の底本である文獻①②③《萬首唐人絶句》には、抄録版として、〔清〕王士禛〔撰〕《唐人萬首絶句

井 口 博 文

選》全七卷が存在していながら、それには一篇の六言絶句も收録されていない。逆に、「古詩・律詩」をふくむ「六言詩歌」の專集としては、八十一詩人の計百二十一首を收録している文獻⑥《歷代六言詩選注》が唯一ある。ただし、同書の内容は、作品の評釋が中心であり、その〈前言〉における樣式論も、詩話の域をこえていない。

六言絶句の先行研究は、おおきく以下の二種に類別できる。

## (1) 傳統的な詩話

絶句一般についての主要な記事は、文獻⑤《千首唐人絶句》の付録〈唐人絶句輯評〉に、拔粹・收録されている。ただし、「六絶」に關する諸説は、「起源・作例・音數律的短所」の三點に集中していて、定型の實態は解明されていない。

## (2) 近代以降の學術的著作

六言絶句は、著名な《漢語詩律學》をはじめとする研究書類では、まったく言及されていないことが、おおい。逆に、本稿の内容と、もっとも直接に關連する記事は、文獻⑦『支那學藝大辭彙』の第一四二六頁にあるので、以下に抜粹する。

【六言詩】……六言絶句の平仄式は、七言絶句平仄式の第五字を各句より省ける形なり。……【六言律】……平仄は二四不同、二五對にて、五言と同じく仄起を常式とす。……」

同説の出典には、前世紀末に大阪の浪華文會が刊行していた、漢詩文の雑誌『侯鯖詩話』第四十號（※現時點では未確認）が記載されている。ただし、ここに抜粹した説は、中國の著作物ではまったく類例がないので、本稿で、あらためて檢證してみる必要がある。

なお、近年のものでは、文獻⑩《詩文聲律論稿》が重要である。ただし、同説は、四言から七言までを演繹的に總合した、非常に特異な學説なので、本稿では言及しない。

以上にみてきたとおり、いずれの文獻においても、「六言絶句の定型性」は、依然として確認されていない、といえるであらう。したがって、本稿では、定型六言絶句について、

唐代六言絶句の定型性について（井口）

作品の校訂・解釋に必要である客觀的基準を、あきらかにしていきたい。

つぎに、本稿の底本《萬首唐人絶句》について、説明しておく。

近體詩の韻律は唐代に完成したので、それ以前の「六言四句詩」は、本稿の内容と直接の關係がないことになる。また、唐代以後の諸作品は、あまりに多數かつ廣範にすぎ、論旨が曖昧になりかねないので、いずれ機會をあらためて論じる豫定である。したがって、本稿では、對象作品の制作時期を、近體詩の韻律の完成期にあたる中世後期、すなわち唐代に限定してある。

そのばあい、唐代の全作品を對象とする「全數調査」は不可飲でもない、對象作品を限定して「標本調査」をおこなうことにする。ただし、「標本」すなわち對象の選擇が完全に恣意的であつては、結論が不安定になってしまう可能性がのこされるであらう。その危険をさけるためには、作品の選擇に、なんらかの明確な基準が必要となる。

現存するもので、ある程度まとまった數量の六言絶句を收録している作品集としては、ひろく享受されてきただけあつ

## 中國詩文論叢 第十七集

て、《萬首唐人絶句》が、もっとも充實している。同書は、句數・言數以外には、形式に關する特定の採録基準を設定していないために、かえって代表作を網羅的に收録している點が、本稿の目的にかなっているであらう。

ところで、《萬首唐人絶句》の現行本には、おおきく以下の二種類がある。

(ア) 初版「文獻①」「宋」洪邁「編」

全百一卷・一萬三十八首。

「六絶」：計三十八首「八五言」卷二十六所收」

(イ) 増訂版「文獻②③」「明」趙宦光・黃習遠「編」

全四十卷・一萬四百七十七首。

「六絶」：計五十首「卷十八五言」附錄所收」

本稿では、收録作品數が比較的好いという點から、(イ) 増訂版を底本とする。なお、同書の收録作品は、その他の作品集類と對照すると、個々の作品名や本文の字句に異同が見える。それらについても、暫定的に、底本にしたがっておく。

なお、對象となる各作品の實態については、ふたつの【附表】で、主要な項目を一覧することができる。表中では、ある項目について、「十」が該當することを、「一」が該當しな

いことを、それぞれあらわしている。

序論の最後に、韻律に關して、以下の一點を確認しておきたい。

唐代の「六絶」に先行する「六言句」は、代表的用途ごとに、おおよそ以下のとおりに三分できる。

(甲) 辭賦：四拍「〇×・〇〇〇×・〇〇〇×」

(乙) 歌謠：四拍「〇〇・〇〇×・〇〇〇×」

(丙) 駢文：三拍「〇〇・〇〇〇・〇〇」

【注記】「×」は休音。「・」は拍の境界。(甲)(乙)については、平仄が問題になることのおおい字に、傍線をつけた。なお、「拍數・休音」の各概念および(甲)(丙)の六言句については、文獻⑧「中國古典詩のリズム」と文獻⑨「リズム的真空」(休音)の認定」を参照した。

唐代六言絶句では、これら三者のうち、(丙) 駢文系の「三拍」句、が中心となっている。本稿では、それらの作品を、さらに「古體・律體・拗體」に下位分類する基準が、直接の問題となっている。したがって、たとえば、(甲) 辭賦系や(乙) 歌謠系の、「四拍」の六言句をもって、「古體」や「拗體」とみなすのではない。

ここで、先入観や印象批評に左右されないために、白紙状態から出發して、近體「六絶」の韻律を検討したい。具體的な方法としては、一般に五言詩・七言詩の韻律で問題とされる八種類の條件を、それぞれ、計量によって整理・體系化し、韻律における重要度をあきらかにすることにした。

また、全體の記述を具體化するために、いずれも「平韻」の、「六絶」「三篇」および「六律」一篇、あわせて四篇の作例を掲載し、それぞれには「注記」で必要な説明をくわえる。そのばあい、作品本文の傍點は、「○」が平聲を、「●」が仄聲を、「◎」が韻字を、それぞれあらわしている。

なお、平仄律については、偶然性の問題が、のこされている。たとえば、ある項目が該当していても、かならずしも意圖された結果ではない可能性がある。そのばあいには、全體の狀況から推定することになる。また、よみわけのある字については、近體詩の韻律によりふさわしい平仄の方を採用してある。

〔1〕二四不同：三十二例。

この「二四不同」は、一例をのぞいて、「二五對・二六對・反法・粘法」のいずれか一種類以上と、かならず併用されている。(なお、唯一の例外である「28①」〈代人寄遠〉二首・其一については、作者の杜牧に特有の、平仄式を逸脱しがちな傾向を考慮すれば、納得しやすいであろう。)

したがって、「二四不同」は、決して偶然の結果ではない、と判断できる。いいかえると、本條件になつてゐる作品には、「近體詩の韻律」という規範意識が、多少なりとも反映されている、ということになる。つまり、「二四不同」に該當しない作品は「古體」である、とみなしてよいことになるだろう。この點からして、本章「二 平仄式」にあげた八種類の條件では、この「二四不同」が、最重要である。

以下には、逆に、この「三四不同」をまもらない「古體」の典型例として、作例〔17①〕をあげておく。

[illegible]

## 中國詩文論叢 第十七集

〔注記〕「平起式」であり、第一句第四字が「孤平」になっている。また、前二句が對句の「前對」である。題名は「詞牌」にもなっていて、《詩譜》卷一「三臺」には、對象作品〔23②〕〔24③〕の二首が掲載されている。

## 〔2〕「二五對」：十七例。

この「二五對」が、かならず「二四不同」と併用されているという點は、決して無視できない。また、大量に存在する實例から判斷しても、單なる偶然の結果、ということでもなさそうである。ただし、これが實際に「定型」の必要條件とされていたのであれば、なぜ中國での言及例が皆無であったのか、まったく不可解である。さらには、實際の制作・鑑賞にあたっても、本條件をまもることによる特別な効果は、みとめられないといつてよい。

あるいは、この「二五對」が、七言詩の韻律である「二六對」とあわせるために、あえて想定されたものである可能性も、のこされている。いづれにしても、同説の典據である『侯鯖詩話』と、唐詩よりもさらに定型性が安定しているはずの、近世以降の「六絶」諸作品とを、あらためて實際に検討する必要があるだろう。

## 〔3〕「二六對」：十六例。

この「二六對」をまもる作品は、第一句で押韻しない「仄起式」であることが、必要である。ちなみに、「二五對」と「二六對」とが併用されている作例は、七篇ある。しかし、そのばあいには、各句末の二字が、かならず「平平」あるいは「仄仄」となるので、表現内容の多様性が制限されてしまう。「六言律詩」では用例がないことからみても、あまり重要な條件ではなかった、と判斷できる。

## 〔4〕「反法」：三十例。

上記の「二五對」「二六對」で検討したとおり、各句第五・第六の平仄については、韻字となるばあいの第六字以外では、平仄が一定しないので、「反法」の検討の對象は、第二・四字に限定した。

第二・四字の「反法」をまもる作品が三十篇あることからいえば、本條件の用法は、量的にも質的にも、「二四不同」とよくにいて、重要であることになる。

## 〔5〕「粘法」：十三例。

前項の「反法」と同様の理由で、「粘法」についても、検

討の対象を第二・四字に限定した。

原則として、「粘法」と「二六對」との併用は、「二四不同・反法」をまもる作品においては、不可能である。というのは、そのばあいには、平韻の作品では、第二・三句末の第六字が、かならず「平・仄」となってしまうからである。

ただし、以下の作例〔21②〕のように、「粘法」には該當せずに、第二・四字の平仄が前二句と後二句とで共通する「失粘」であれば、「二四不同・二五對・二六對・反法」が、同一作品で使用できる。ちなみに、「二五對・二六對」の兩條件が該當する「失粘」の作品は十六例もあり、量的には無視できない。

0	● 答樂天 二首・其二	● 樂天に答う 劉禹錫
1	● 一政官軋軋	● 一政 官たること軋軋たり
2	● 一年老駸駸	● 一年 年老いること駸駸たり
3	● 身外名何足算	● 身外の名 何ぞ算うに足らん
4	● 到來詩且同吟	● 到來の詩 且く共に吟ぜん

〔注記〕「仄起式」であり、「二四不同・二五對・二六對・反法」をまもっている。また、前二句も後二句も對句の「兩對」あるいは「全對」の作品であり、さらに、第一句の第四字は「孤平」

唐代六言絶句の定型性について（井口）

になっている。なお、第三・四句の構造は、全対象作品のなかで唯一、「三言十三言」になっている。そして、対象作品〔20①②〕白居易〈寄劉夢得・二首〉とともに、二首連作の贈答詩をなしており、形式も對應している。

以上で検討してきた結果によれば、六言詩の韻律に固有の「二五對・二六對」を、定型六言絶句の條件とみなすに充分な根據は、みいだせなかった、といつてよい。したがって、前掲の作例〔21②〕などは、「拗體」とみなすのが適當、ということになるであらう。それに對して、定型の五言詩・七言詩の韻律とも共通する「二四不同・反法・粘法」は、やはり安定していて、「律體」の條件とみなすのが相應だろう。

〔6〕平起式⇄仄起式：それぞれ二十例⇄三十例。

「律體」の対象作品では、平起式が五篇、仄起式が六篇ある。かりに「二六對」が必須の條件であったとするならば、前掲の作例〔21②〕のような「失粘の仄起式」こそが、正格になるはずである。ただし、「二六對」自體の重要性が「粘法」以下であるとすれば、この説も成立しなくなる。五言詩では「仄起式」が、七言詩では「平起式」が、それぞれ正格とされている點を考慮しても、いずれか一方が六言詩の正格

## 中國詩文論叢 第十七集

であるとは判断しきれない、といえるであろう。

## 〔7〕第一句末脚韻：十二例。

この「第一句末脚韻」は、「五言」では變格であり、「七言」では正格となっている。十一篇ある「律體」の對象作品では、そのうち四例が、第一句末にも押韻している。「仄韻」の作品では、全三篇が、本條件に該當している。「平韻」の作品に、特筆すべき傾向はない。結果的に、近體「六絶」の韻律において、本條件が、必須あるいは嚴禁の條件であると、判断しきれないであろう。

## 〔8〕第四字孤平：九例。

この「第四字孤平」は、特に近體七言詩の韻律では、嚴禁の條件である。本稿の對象作品では、全例が奇數句にあり、「律體」では原則として使用されていない。（なお、【付表】では、該當句を「起・承・轉・結」によって區別してある。）ただし、「律體の六絶」における唯一の例外は、以下の作例〔25〕の第一句である。

0 歸山

やま  
かえ  
山に歸るこきよう  
顧況

1 心●事●數●莖●白●髮●  
2 生涯●一片●青山●  
3 空林●有●雪●相●待●  
4 古路●無●人●獨●還●

心●事●は●數●莖●の●白●髮●た●り●  
生●涯●は●一●片●の●青●山●た●り●  
空●林●に●は●雪●あ●り●て●相●い●待●つ●も●  
古●路●に●は●人●な●く●し●て●獨●り●還●る●

〔注記〕「仄起式」で、「二四不同・二五對・反法・粘法」をまもっている。また、前二句も後二句も對句の「兩對」である。

以上の検討をふまえると、「近體六絶」の平仄律は、以下の四點にまとめられるであろう。

(i) 「平韻・二四不同・反法・粘法」が、必要條件に該當する。

(ii) 「二五對」「二六對」「平起式・仄起式」「第一句末脚韻」は、偶然の結果である。

(iii) 「第四字孤平」は、禁則である。

(iv) 「五絶・七絶」と比較して、いずれか一方の韻律と特に近似しているとは、いえない。

そして、これら四點の平仄律を基準にすると、本稿で對象とした「六絶」は、【付表】の(E)のとおり、三分されることになる。それぞれの作品數と、必要最小限の條件とを、あらためて以下にまとめておく。

①古體「作例〔17①〕」：二十例。

「仄韻」の作品。「二四不同」をまもらない作品。

②律體「作例〔25〕」：十一例。

「二四不同・反法・粘法」をまもる「平韻」の作品。

③拗體「作例〔21②〕」：十九例。①③以外の作品。

〔參考〕六言律詩

一般に「律詩」では、形式上の規則が、「絶句」よりも厳密である。本稿では、比較の材料として、文獻④《文體明辨》卷十六へ六言詩・律詩を所収の四首についても同様に調査し、その結果を【付表Ⅱ】にしめした。（ちなみに、同書でいう「律詩」とは、古體をもふくむ「八句詩」である。）

以下には、作例として、対象作品「丁」をあげておく。

0	送李億東歸	李億の東に歸るを送る	周賀
1	黃山遠隔秦樹	黃山は遠く秦樹を隔て	
2	紫禁斜通渭城	紫禁は斜めに渭城に通ず	
3	別路青青柳發	別路には青青として柳發き	
4	前溪漠漠花生	前溪には漠漠として花生ず	
5	和風澹蕩歸客	和風は澹蕩として歸客あり	

唐代六言絶句の定型性について（井口）

6	落日殷勤早鶯	落日は殷勤として早鶯あり
7	灞上金鐙未飲	灞上の金鐙 未だ飲まざるに
8	讌歌已有餘聲	讌歌 すでに餘聲あり

〔注記〕「平起式」で、「二四不同・二五對・反法・粘法」をまもっている。第一〜三聯は、それぞれ對句になっている。

ただし、今回の対象例はわずか四篇にすぎないので、ここでは、あくまで一般化をさせて、二點の韻律的特徴を指摘するにとどめておく。

（1）律體・拗體の作品は、「平起式」であり、「二四不同・反法」をまもっている。

（2）「二六對」の用例は皆無である。

いずれの點も、近體「六絶」の韻律を今後さらに検討してゆく際に、有力な材料となる可能性がある。

三 對句

絶句における對句は、律詩のばあいとはちがつて、定型に不可缺の條件となつてはいない。したがって、對句が、狹義の「詩歌の韻律」とは無關係である點を、あらかじめ確認しておくことが必要である。しかしながら、「六絶」における



對句は、表現形式の一要素として、きわめて重要なので、この機會に實態を検討したい。

まずは、比較の材料として、「七絶」における對句の用法を、以下に紹介しておく。

①前對：比較的多數。 ②後對：比較的多數。

③兩對：例外的少數。 ④無對：比較的多數。

そして、「五絶」における對句は、「七絶」における用法と比較すると、①④全體にわたって、さらに多數であることが、經驗的に理解されている。

さて、對象作品の「六絶」における對句について、【付表Ⅰ】の(F)にあらわされた作品數を、用法別に紹介してみよう。

①前對：十七例。 ②後對：三例。

③兩對：二十三例。 ④無對：七例。

對句の使用頻度を比較すると、おおい順に「六絶：五絶：七絶」となっていて、「六絶」と「七絶」との差異は、「兩對」の作品で最大になっていることがわかる。

ここで、検討の對象を、「六絶」における對句の用法に限定してみる。すると、「古體・律體・拗體」に三分類しても、

それぞれに固有の傾向を指摘することは、不可能といつてよい。ただし、前記①④のなかでは③兩對が最重要、と指摘することは可能であろう。なぜならば、六言句の音數律的特徴は、長所・短所ともに、「兩對」の作品でこそ、もっとも強調されているからである。ちなみに、對象作品「6①⑦」王維〈田園樂・七首〉は、連作の全篇が「兩對」である。同作品が「六絶」の代表作とされてきた事實は、創作・讀書史上に決定的な影響力があつた、とかがえてよいだろう。

ところで、「六言詩歌における對句」は、なによりも「駢文の六言對句」を想起させる。たとえば、「唐詩にいたる前段階としての魏晉南北朝時代には、「六言徒詩」が、きわめて少數だった。そのかわりに、當時に盛行していた「四六駢儷文」の六言句の蓄積が反映されて、唐代における「六言徒詩」が、一應の定着をみた」ということの可能性も、指摘できらるであろう。

ちなみに、「六絶」の對句は、現代中國の詩文では、「二四不同・二六對・粘法」をまもる「六言對聯」に近似している、といえる。そうであるとすれば、文學史的には、「駢文：六言詩詞：對聯」という六言對句の系譜が、指摘できるこ

とになるであろう。

なお、「六絶」で對句が多用された要因については、個別の作品内容とも関係するので、本稿では、くわしく検討できない。ただし、音數律的には、「二字語を單純に三個ならべれば六言句になる」という、造句の單純さが重要だともおられる。

ここでは、さらに、「對句」と「連作」との關係を示唆しておきたい。

對句は、ある一定の内容を多角的に表現する技法である反面、句數・言數が限定された定型詩で使用されると、該當する兩句の表現内容を、量的に半減してしまう。そのため、對句を多用するばあいには、表現内容の總量を維持しようとするならば、結果として、連作の比率が増加することになる。いかえると、「六絶」では、連作形式によってこそ、對句の多用が可能になった、ともいえるのではないだろうか。たとえば、本稿の對象作品では、合計五十首のうち、過半數の二十九首が、連作である。なかでも特に「二首連作」の絶句は、量的には律詩に相當するので、非常に興味ぶかい。

#### 唐代六言絶句の定型性について（井口）

### 四 結論

最後に、六絶の定型性が安定しなかった要因について、ひととおり検討しておきたい。ただし、「休音」の概念を活用した音數律の見解は、すでに文献⑧「中國古典詩のリズム」で提出されているので、ここでは、制作時期の問題を中心にする。

六言絶句の制作時期については、底本の唐代四分説を踏襲して、【付表Ⅰ】の(D)に示めてある。集計した結果を、あらためて以下にまとめておく。

- ① 初唐：四名・九篇。
- ② 盛唐：二名・八篇。
- ③ 中唐：十三名・二十九篇。
- ④ 晚唐：二名・三篇。
- ⑤ 不明：一名・一篇。

これによれば、「六絶」の作例が③中唐期に集中していることは、あきらかである。特に「律體」の作品十一篇は、對象作品「4⑥」張説〈舞馬詞・六首〉が②盛唐期のものであることを唯一の例外として、すべて③中唐期につくられていることが確認できる。

その要因としては、盛唐詩への對抗意識、という點が指摘

できるのではないだろうか。近體の五言詩・七言詩は、李白・杜甫らによって、盛唐期に完成された、といつてよい。そのあとにつづくものとして、中唐期の詩人たちは、あらたな詩境の開拓を模索していたはずである。「六言絶句」は、その典型例とみなしてよいであろう。

その後、「六絶」の創作は、晩唐期には一時的に衰退してから、宋代以降の近世に繼承されることになった。この事實は、詩歌における「説理性」や「日常性」、あるいは「古文」の盛衰などと並行する現象として、位置づけておくべきであろう。

それでは、結局のところ、六言絶句の定型性は、なぜ最後まで不安定であつたのだろうか。

序論の最後で確認しておいたとおり、唐代の「六絶」では、「休音」の存在しない、「三拍の六言句」が主流をなしている。その結果、「音數律」の次元では、多様性が不足し、對句が多用されやすくなっている。それに對して、「平仄律」の次元では、逆に、「律體」的な均質性をさけて、非「律體」的な雜體性を重視した、とかがえられる。たとえば、既述のとおり「六絶」の代表作とされる對象作品〔6①〕

⑦ 王維〈田園樂・七首〉でも、「古體」が五篇、「拗體」が二篇で、「律體」の作品は皆無である。

文學史的にみると、六言詩の韻律に對する關心は、五言詩・七言詩の各韻律とは比較にならないほど、よわかった。そのことには、六言詩が、南北朝時代の韻律論の對象外だったことにも、遠因があるだろう。

いうまでもなく、當時の韻律論の對象は、五言詩に限定されていた。したがって、七言詩も、韻律論の對象外であつた點においては、六言詩と同様であつた。ただし、七言詩句の一般的な構成は、五言詩句のうえに二字をくわえたものなので、七言詩の韻律については、五言詩からの類推・展開が容易である。したがって、南北朝時代における韻律論の未開狀態は、七言詩のばあいには、おおきな障害とはならなかつた、とかがえられる。

以上の考察をふまえれば、「近體六言詩の韻律は、先行していた近體五言詩・七言詩の韻律とあわせるために、唐代にはいつてから、若干の試行錯誤をへて、急造された。そのために、一應の定型の成立が、中唐期にずれこんだ」と解釋することも、可能かもしれない。

19—	詔追南來諸賓	柳宗元	中	+	+	+	+	—	—	—	+	平	—	—	—			
20①	寄劉夢得・二首	白居易	中	+	+	+	—	+	—		+	—	—	+	+	21		
②				+	+	+	+	+	—	+	—	轉	+	+	22			
21①	答樂天	劉禹錫	中	+	+	+	—	+	+	—	+	—	—	+	+	23		
②				+	+	+	+	+	—	+	—	起	+	+	24			
22—	酬楊侍郎				+	+	+	—	+	+		平	—	+	—	25		
23①	宮中三臺詞・二首	王建	中	+	+	+	—	—	—		+	平	—	+	—	28		
②				+	+	+	+	+	—	+	—	—	+	—	29			
24①	江南三臺詞・四首			+		—	—	—	—	+		—	—	+	—	30		
②				+	+	+	+	+	—	+	—	—	+	—	31			
③				+		—	—	—	—	+	平	轉	+	—	32			
④				+		—	—	—	—	+	平	—	—	+	33			
25—	歸山	顧況	中		+	+	+	—	+	+	+	+	—	起	+	+	27	
26—	思婦			+		—	—	—	—	+		—	—	+	+	—		
27—	過山農家			+		—	—	—	—	+		平	—	+	+	—		
28①	代人寄遠・二首	杜牧	晚	+	+	—	—	—	—	+		—	—	+	—	—		
②				+		—	—	—	—	+	—	—	+	—	—			
29—	春野作	貫休	晚	+		+	—	—	+	—	+	仄	—	—	—	37		
30—	詠八十一顆	薛壽	中		+	+	—	—	+	+	+	+	—	—	+	+	36	
合計	50首	21名+1	—	20	19	11	32	17	16	30	13	20	30	16	9	41	27	38

(A) 作品番號：底本で使用されている「1～30」および小番號①～⑦を踏襲。

(G) 底本初版收録作品：通番を記載。

【付表Ⅱ】《文體明辨》卷十六所收分：六言律詩

A	B	C	D	E	1	2	3	4	5	6	7	8	F	G				
番號	作 品 名	作者名	時	詩體	二	二	二	反	粘	起式	一	孤	對	句	初			
			期	古	拗	律	四	五	六	法	法	平	仄	韻	平	二	三	版
甲	苕溪酬梁耿別後見寄	王維※	盛		+	+	—	—	+	+	+	—	—	+	+	—		
乙	送萬臣	盧綸	中	+		—	—	—	—	—	+	平	—	+	+	—		
丙	送陳明府赴淮南	韓翃	中	+	+	—	—	+	—	+	平	—	+	+	—			
丁	送李億東歸	周賀	中		+	+	+	—	+	+	+	—	—	+	+	—		
參考	4 首	4 名	—	1	1	2	3	1	0	3	2	3	1	2	0	4	4	—

(F) 一般に對句とされない第一・四聯は、對象外。

※ 一般には「中唐」の「劉長卿」。

【附表 I】《萬首唐人絕句》卷十付錄：六言

A	B	C	D	E	1	2	3	4	5	6	7	8	F	G
番號	作 品 名	作者名	時 期	詩 體	二 四	二 五	二 六	反 法	粘 法	起 式	一 仄	孤 平	對 句	初 後
1—	回波詞	李景伯 沈佺期 裴談	初	+	—	—	+	—	+	+	平	起	—	18
2—				+	—	—	—	+	+	+	平	起	—	19
3—				+	—	—	—	—	+	+	仄	起	—	20
4①	舞馬詞・六首	張說	初	+	+	+	+	+	—	+	—	—	+	—
②				+	+	—	+	+	—	+	—	—	+	—
③				+	+	+	+	—	+	+	平	—	+	—
④				+	+	—	+	+	—	+	—	—	+	—
⑤			+	—	—	+	—	—	—	+	—	—	+	—
⑥				+	+	—	—	+	+	+	—	—	+	—
5—	擬娼樓節怨	劉方平	盛	+	—	—	—	—	—	+	—	—	+	—
6①	田園樂・七首	王維	盛	+	+	+	+	+	—	+	—	—	+	1
②				+	+	—	+	+	—	+	—	—	+	2
③				+	—	—	+	+	+	+	—	—	+	3
④				+	—	—	—	+	+	+	—	—	+	4
⑤				+	—	—	—	—	—	+	平	—	+	5
⑥				+	—	—	+	+	+	+	—	起	+	6
⑦				+	—	—	—	—	—	+	—	—	+	7
7—	尋山居	劉長卿	中		+	+	+	—	+	+	+	—	+	12
8—	送陸澧還吳中				+	+	+	—	+	+	+	—	+	13
9—	赴潤州留別鮑侍御				+	+	+	—	+	+	+	平	—	14
10—	寄李袁州桑落酒	郎士元	中	+	—	—	—	—	—	+	—	—	+	38
11—	小江懷靈一上人	皇甫冉	中	+	+	—	+	+	—	+	—	—	+	15
12—	送鄭二之茅山				+	+	+	—	+	+	+	—	—	16
13—	問李二司直所居云山			+	+	—	—	+	—	+	—	—	+	17
14—	奉寄皇甫補欽	張繼	中	+	+	—	+	+	—	+	—	—	+	34
15—	塞姑一首	樂府	?	+	+	—	—	—	+	+	仄	—	—	35
16①	宿甌山寺・二首	韓翃	中		+	+	+	—	+	+	+	平	—	8
②					+	+	+	—	+	+	+	平	—	9
17①	三臺詞・二首	韋應物	中	+	—	—	—	—	—	+	—	起	+	10
②					+	+	+	—	+	+	+	—	—	11
18—	剡溪舟行	朱放	中	+	+	—	+	+	—	+	—	—	+	26

## 【文獻】

## 〔一〕作品

①《萬首唐人絕句》〔宋〕洪邁〔輯〕

一九五五 文學古籍出版社

②《萬首唐人絕句》〔明〕趙宦光・黃習遠〔編定〕

一九八三 書目文獻出版社 古籍選讀叢書

③《萬首唐人絕句校注集評》〔主編〕

一九九一 山西人民出版社

④《和刻本文體明辨》〔明〕徐師曾〔編〕

一九八二 中文出版社

⑤《千首唐人絕句》〔富壽孫〕選注 劉拜山・富壽孫〔評

解〕

一九八五 上海古籍出版社

⑥《歷代六言詩選注》〔壯子〕選注〕

一九九一 大連出版社

## 〔二〕研究

⑦『支那學藝大辭彙』近藤全〔著〕

一九三六 立命館出版部

⑧「中國古典詩のリズム」松浦友久〔著〕

一九八六 大修館書店 『中國詩歌原論』所收

⑨「リズム的眞空」（休音）の認定」松浦友久〔著〕

一九九五 大修館書店 『萬葉集という名の双關語』所收

唐代六言絶句の定型性について（井口）

## ⑩

《詩文聲律論稿》 啓功〔著〕

一九九七 中華書局 《漢語現象論叢》所收